

まな板岩

一

相模灘を横断して鎌倉から伊豆へ渡る最短距離は、伊豆半島では一番東につき出ているといわれる鳥崎である。（現在では明治の初めに日蓮崎と改称、聖人の名を冠した地名は全国でここ一か所）晴れた日には鳥崎では、大島は泳いでいけそうな程に近くにみえ、それに続いて、伊豆七島の中の利島、新島、式根島等がみえる。三浦半島は勿論のことだが、遠く房州の山々がはつきりみえるのである。

今、聖人に乗せた船は、この鳥崎に向って進んでおつた。

「お役人さまに申し上げます」

「なんじゃ、うるさい奴め、先程から申しおるではないか、船頭は黙って船さえ動かしておればよいのじゃ、何処そこに舟をつけるとはこのわしが指図するから、それまでは黙って船を動かす

「お祈りなさい。わかつたなあ……」

「お言葉返すようで申し訳がございませんが、海の上へまいりましたら、やはり船頭のいうことを聞いていただかなければ困ります。もはや伊東はとづくにすぎまして、あの辺が川奈でございます。くもつて参りましたので見通しがききませんが、ここらは篠見ヶ浦の辺りでございます」

「わかつておるのじゃ。船頭、わしも御役目を蒙つて、この船に乗つておるのだ。この辺の磯のことは、もしかしたら、船頭お前よりもくわしいかも知れないぞ……」

「でも、あの坊さまは伊東へ流罪ということでございましたが……」

「左様、伊豆の伊東へ流罪、おあずかりする人は伊東八郎衛門様じゃ。わかつとる……どうしておるあの坊主、少しは神妙にいたしておるか」

「どういたしました、益々元気で御題目とやらを盛んに唱えております……」

「左様か元気で結構、船頭、あの黒くつきでてる処は鳥崎だったなあ……」

「へい、よく御存知でございますなあ……」

「先刻いつたではないか、お前よりもこの辺の海辺はくわしいとなあ、あれへつけれ」

「あれといひますと鳥崎へつ」

「そうだ……」

「滅相もございません。いくら知っておると申しましても且那はやはりしろうとでございます。」

あれには船が着きません。船が着くどころか、あの辺は、かくれ岩が多くて、へたをすると船がやられてしまいます」

「船頭、船頭、余りつべこべいうなよ。そんなことも先刻承知なのだ。鳥崎というのはなあ、この篠見一帯の岩がまっくらである所からつけた名じゃ、その岩がまた切ったように海にせまってるが、潮の上げぐあいでは、かくれ岩が多くて船のつける所がない。岩ずたいに岸にいけるように見えるが、潮の上げぐあいでは、到底岸边になぞゆけるものではない。まあまあ人を捨ててゆくのならば、こんな工合のよい所はないのだ。波はあの通り荒く、いつときも岩の上には立ってはおれまい」

「では、あの坊さまを捨ててまいりますので」

「いや、そういう訳ではないがなあ、だいたいあの坊主は、日蓮というて、鎌倉における時は諸宗を悪口いたし、あまつさへ御政道に口を出して北条様の天下を論難し、兵器を家にたくわえ、徒党をあつめた件によつて、実は焼き討ちに処せられた大罪人じゃ、一時鎌倉から姿を消したので、お上におかれては不問にしておつたが、この春より再び鎌倉に舞い戻つて、前にも増して、御政道を非難いたすのでからめ捕つて、今日の流罪となつたのじゃ。じゃによつて、流罪というても伊東様の役所までとどけなくともよい。まあまあ拙者が采配に任せると、密なる御命令もあつてのことだ……どうじゃ船頭こつちは安全だが、相手はすこぶる危ないといったような手頃な場所

があるであろうがなあ、はっはっはっ……」

「左様な訳があつてのことでございますか、どうも馬鹿正直なものでございますから余計なことを申し上げました。それならばあの鳥崎の真下にこの辺でまな板岩という岩がございます。二間四方位な平らな岩でございますが、どうしたことかこの岩は一つ一つがまな板のようなきれめのはいつた岩からできております。ここならば、少し波が静まれば、人の一人ぐらいがおりる間ならば、船も損することはありますまい」

「左様か、それは都合のよい場所だ。そうときまつたら空模様も少し危なくなつて参つた。早いがよい、早くつけろ」

「畏こまりましてございます」

「断つておくが船頭、拙者は最早知らぬ方が都合がよいから、ここから動かないぞ、よつて船をつけたらお前がああ坊主の側にいつて、ここが伊東でございます。磯ずたいにおいき下さい、今日の風の都合でこんなところに着けましたが、けつして危ない所ではありませんから、と、そこいら辺はうまくやつておいてきほりにしてやつてくれ。わかつたなあ」

「合点でございます……船を早速につけましょう」

磯菊の香が潮の香の間にする。この篠見浦のまつくろな岩の岩辺に、不思議と磯菊が沢山に生え、土のないのに何処に根をはるかと思う程であるが、潮風があらいで葉と葉がこすれて、その葉から美しい匂いを、潮の香に負けじと放つのである。

まな板岩に聖人を残した船は、暮れかけた海に忽ちにみえなくなってしまった。

「……………」

一心欲見仏

不自借身命

時我及衆僧

俱出靈鷲山

……………」

まな板岩に立たれた聖人の口から出る経文の声である。足許に荒れ狂う波。法衣の裾は風にはためいてちぎれ飛ばんとしておる。六尺四寸の偉丈夫は荒海の岩上に置いてもしもその尊厳を失わなかった。却って聖人のみを知る法華経法悦の境地であった。法華経には園中林中山曠谷

いたる処すべてこれ法華經の道場とあるが、ここ伊豆篠見浦のまな板岩も聖人にとっては、ただ法華經の道場であつた。

法華經の道場であるならば何等特別に変わったこともない筈である。

「……」

我此土安穩

天人常充滿

「……」

何故聖人が磯づたいに行こうとしなかつたのか、何故聖人はまな板岩から動かずに經文を唱えていられたのであろうか、凡べては聖人の御仏智である。

その時鳥崎の岩かげからまことに降つて湧いた如く一艘の船がでてきたのである。

「御出家さま……御出家さま……」

あわてた声で船頭かよんだのである。

「おう……」

「なにをされておりますか、そんな危ない処で、その岩はあと半時もすれば海の中に吞まれてしまふ岩ですぞ……」

「そうじゃろう、私もそう思つておつた」

「のん気なことをいっておりますなあ、早くこの船におのり下さい」

「左様か、有難いなあ、仔細あつてこの岩に捨てられたもの助けるもよいが、後で迷惑をかけても心ぐるしいから、よく考えてからにしてください」

「冗談どころじゃありませんよ、早く、早く、さあさあこの船におのり下さい、訳は後でゆっくりききましよう」

船頭は聖人を船にのせると、あわてるようにして岩からこぎさつたのである。

半丁あまりは口もきかずにこぎさつた漁師はやがて背後をさすと、

「ほうら、御出家、今まであんたの居た所は何処だかわかりますか、わかりますまい、もう海の中へ吸いこまれてしまつたんですぜ、危ない処だつた」

漁師はほつとした様な顔で聖人を眺めた。

「危ないところだつたなあ、日蓮厚く礼を申すぞ」

「今日は母親の祥月命日の日でございます、御坊さまを助けるなんて、こんな有難いことはいりません。私は川奈の漁師で弥三郎と申します。私の家へご案内いたしましたましよう」

「左様か、助けられた以上はお前にこの身体は委せる、たんとでもして貰いましよう」

陽はとつくに落ちてあたりは暗かった。雨雲が海面をおうて、十二日の月は何処にあるのか一向にわからない。

「あすこが川奈でございます」

弥三郎にいわれてみると、そこには暗い中にも、お椀のような可愛い入江がみえてきた。

「おや、ばかに松明があつちこつちと動いておりますなあ」

「左様じゃなあ、あすこが川奈の部落か」

「これは、なにか部落に起きたに違いない、失礼ですが御僧侶、あなたは鎌倉におられたといいましたなあ」

「わしは鎌倉の日蓮というもの、仔細あつて今日伊豆の伊東へ流人となつた」

「そうでしょう、それで村ではあの様に騒いでおるのでしょう。よろしゅうございます。この弥三郎が引き受けました。なんとか、おかくまい申しませう」

弥三郎は入江に舟をつけず、まっすぐに伊東よりに舟をすすめると、入江のぼずれのえぼし岩に舟をおいて、

「さあさあお上りください、ここであの松明の灯がみえなくなるまで少し様子をみましょう」と聖人へ言葉をかけるのだった。